

# 周山城跡



調査期間：令和6年11月5日（火）～ 12月13日（金）（予定）

調査機関：京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

## 1 はじめに

調査地は右京区京北周山町城山に所在する周山城跡です。周山城は、丹波を攻略した明智光秀によって、天正7～9年（1579～81）頃に東丹波の拠点として築城されました。眼下には、若狭、近江、丹波、京都を結ぶ街道が通り、水運で栄えた上桂川を望む交通の要衝に立地しています（資料1）。

城跡は、黒尾山から延びる尾根上のピーク、城山（標高480m）山頂に本丸を置き、本丸から延びる八つの支尾根上に曲輪を設けた東西約1.3km、南北0.7kmに及び大規模な山城です（図1）。本能寺の変後、天正12年（1584）に豊臣秀吉が周山城に一時入った史料を最後に記録から消えることから、天正年間後半には廃城になったと考えられます（資料2）。現在、山中には石垣や郭の跡が数多く残されており、往時の姿が偲ばれます。

## 2 調査について

京都市では、近年多発する自然災害から遺構を保全し、周山城の価値を把握するため、平成29年度より調査を実施しています（資料3）。今回の調査は大手道が通る二之丸虎口（城門）の構造を明らかにすることが目的です。調査面積は100㎡です（図2）。

調査の結果、階段、城門、石垣を確認しました（図3）。  
**階段** 階段はチャートを主体とする石積です。長さ9mで11段あり、9段目の上面に平坦面が広がり、礎石が見つかったことから城門が存在したことがわかりました。城門を潜り、さらに2段上がり曲輪の中に入る構造です。階段の幅は6～7mで手前が狭く奥に向かって広がります。踏面は45～65cm、蹴上げは25～35cmとなります（図4・5）。

**城門** 階段9段目上面に広がる3.5×7mの平坦面で2基の礎石を確認しました（図6）。また、9段目の踏石は2石のみ残りますが、他の踏石と比べ大型の石材が使用されています。そのうちの1石は平坦面で見つかった礎石と柱筋が通るため（図7）、門の鏡柱（親柱）礎石、平坦面の礎石は控柱となる四本足の門となります（図8）。門の規模は桁行5.4m、梁行1.8mの大型門であることから、薬医門であったことがわかります。

**石垣** 二之丸南面の石垣で、長さ7m分、高さは2.5mを確認しました。70～75度の勾配を持ち、最大で7段分が残ります（図9）。二之丸平坦面との比高は4m以上あるため、本来はさらに高く積まれていたことがわかります。石材は長辺を横向きに揃え、横方向に目地が通ります。種類はチャートを主体としますが、頁岩、砂岩、花崗岩など多様な石材が使用されています。また、階段との接続部の隅石に鎌倉時代の宝篋印塔の基礎が埋め込まれているほか（図10）、石仏も出土しました（図11）。垣に沿って内側約2m幅には、長径20cm前後のチャート等が裏込めとして詰め込まれています。石垣前面には築石や裏込めの石材が散乱しており、廃城に際し城の再利用を防ぐために、築石を意図的に崩したことがわかります。

## 3 まとめ

今回の調査によって、二之丸虎口は長大な階段と大型薬医門で構成される虎口であることが明らかとなりました。虎口の設置箇所は、曲輪幅が最も狭い場所（幅約13m）であり、曲輪規模に対し不相応の大きさといえます。さらに9段の階段で奥行を持たせ、桁行5.4mもの大型薬医門を配置しています。薬医門は、鏡柱と控柱を覆う大きな屋根構造を持つことが特徴で、高い格式を誇る城門です。二之丸は、本丸と豎石壘を通じて一体化した周山城の中



図1 調査地位置図（1：8,000）



図2 二之丸及び調査区配置図（1：1,000）



図4 二之丸虎口階段（東から）

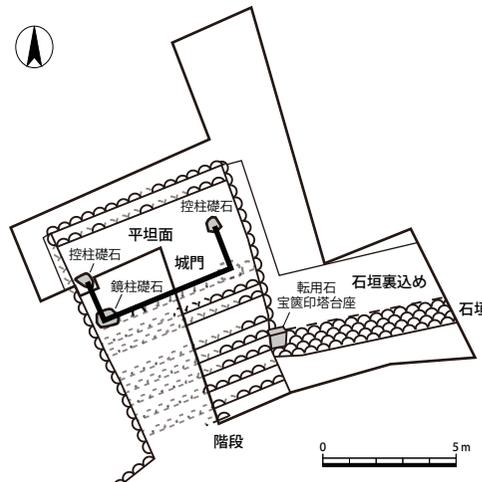


図3 調査区実測図（1：200）

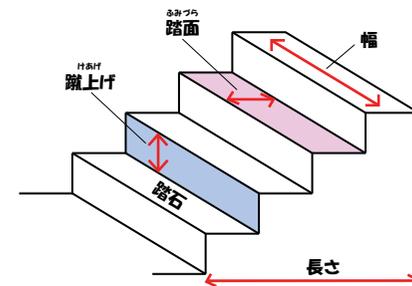


図5 階段模式図

核を担う曲輪であり、大手道が通る虎口は実質上の大手門であったと考えられます。大型の薬医門を備える虎口は、光秀の権威と格式の高さを示しているといえるでしょう。

虎口に接続する南面石垣についても、北面と比べ一回り大きい石材を使用し、面を揃えることを意識した丁寧な積み方をしており、石造物の転用石を目立つ場所に配置することと合わせ、大きな視覚的効果を狙ったものと評価できます。



図6 二之丸虎口城門（南西から）



図7 城門鏡柱（手前）及び控柱（奥）礎石（南から）

周山城築城にあたり、光秀が麓の社寺から石造物や木材を徴発した伝承が数多く残され、大きな反発があったことが知られています（資料4）。石垣に配された複数の転用石の存在は、伝承が事実であったことを示しており、新たな領主としての光秀の厳しい一面を、また見栄えを強く意識した虎口空間は緊迫した当時の情勢を雄弁に物語ってくれます。

周山城跡は、存続期間がほぼ天正年間中頃に限定でき、築城技術が飛躍的発展を遂げた織豊系城郭の発達過程を把握する定点となり得る城郭です。光秀は、宣教師ルイス・フロイスに「築城に造詣が深い」と評されています。しかし、築城した亀山城、福知山城は後世に改変を受け、坂本城は廃城となり資材は転用されていることから、周山城跡は当時の築城技術を今もうかがい知ることができる貴重な城郭といえるでしょう。

（西森正晃）



図8 薬医門イメージ図【参考】



図9 二之丸南面石垣（西から）



図11 出土した石仏（道祖神）

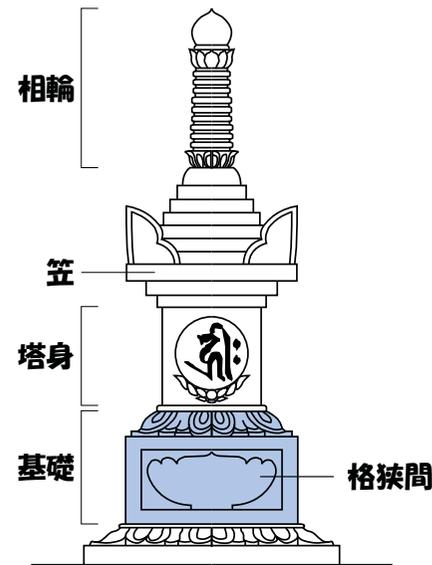


図10 宝篋印塔模式図及び築石に転用された基礎

